

コロナウイルスの地球規模の蔓延により「コロンブス交換」という言葉が注目されている。一五世紀末期にコロンブスがアメリカ大陸に到達、欧州からウシ、ウマ、ブタなどの動物、バナナ、レタス、コムギなどの植物を持ち込む一方、テングクネズミ、シチメンチョウなどの動物、アボガド、カボチャなどの植物をアメリカ大陸から持ち帰った行動を意味する。

それらのなかでも最悪の交換は疫病であり、コレラ、ペスト、天然痘などを持ち込まれた中米のアステカ王国は天然痘とチフスにより人口が激減、一五二一年に滅亡した。一方、持ち帰った梅毒や黄熱も欧州で蔓延、梅毒による死者は数年で五〇〇万人にもなり、さらに世界へ伝染し、二〇年後には日本にも到達している。

この交換は現代にも継続している。エイズウイルスやエボラウイルスはアフリカの奥地に土地や食料を獲得するために進出した人間が交換により感染した病気であるし、コロナウイルスも現状では詳細不明であるが、中国の奥地に食料や資源などを獲得するために侵入した人間が動物から感染したのではないかと推定されている。

これらの行動の結果、世界は均質の状態に移行していく。かつては地域ごとに固有の自然環境や独自の伝統文化が存在し、多様な自然と文化で構成されていた地球は急速に均質になっている。筆者は世界の僻地の先住民族を訪問した経験があるが、サハラ砂漠の集落でも北極圏内の集落でもインスタントラーメンが販売されていた。

このような交換行動によって地球から多様が消滅して均質になっていく状況を新規の地質時代の到来と理解し、「均質新世」と名付ける地質学者や歴史学者が登場してきた。これまでは磁極の反転や隕石の襲来など、自然現象によって環境が激変した事件が地質年代の区切りであったが、人類の活動が境界を出現させるのである。

これまで交換は帆船、汽船、鉄道、空路など交通技術の発達が加速させてきた。ところが現在、新規の交換の手段として主役になったのが通信技術である。電話は発明されて世界の二〇%の人々に普及するのに一三〇年が必要であったが、携帯電話は三五年、インターネットは二〇年で普及し、現在は六〇%の人々に浸透している。

情報には複雑な性質があり、少数が独占するほど価値が増大する情報と多数が共有するほど価値が増大する情報が存在する。インターネットは両方の情報の伝達が可能な特異な手段である。暗号にした秘密情報を特定の人間のみ伝達できるし、世界の何億という人々に一瞬にして同一の情報を伝達することも可能である。

この後者の能力により、一瞬にして世界の膨大な人数が情報を交換する時代が登場した。20世紀初期にスペイン風邪と名付けられたインフルエンザのウイルスが世界に波及するのには数年という時間が必要であったし、今回のコロナウイルスでも数週で世界に伝染したが、インターネット内部のウイルスは一瞬で世界を席卷する。

G・オーウェルの『一九八四』を参照するまでもなく、一様な情報しか流布しない社会は暗黒であり、多様な情報が自由に流通する社会が情報社会の本質である。現在のところ「均質新世」は生物世界を対象に名付けられた名称であるが、これが情報世界に波及すれば世界は暗澹たる状態になる。情報のコロンブス交換がもたらした世界の再考が必要な時期である。